

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：34310

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884070

研究課題名(和文)現代アジアにおける女性キリスト者の貢献可能性と環境倫理 タイを事例として

研究課題名(英文)Contributory Possibilities of Female Asian Christians and Ecological Ethics: A Case Study of Thailand

研究代表者

藤原 佐和子 (FUJIWARA, SAWAKO)

同志社大学・研究開発推進機構・助教

研究者番号：20735295

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第一に、キリスト者が宗教文化的な少数者に留まっている社会において、アジアの女性キリスト者が持つ教会と社会に対する「貢献可能性」についての新しい視座を提供することを目的として、タイのプロテスタント最大合同教派タイ・キリスト教団に1988年に発足した「神学的訓練を受けている女性たちのグループ」の活動についての事例研究を行った。本研究は、第二に、アジアの女性キリスト者によるエコロジーないし環境正義への取り組みについての将来の応用研究を念頭に、世界教会協議会とアジア・キリスト教協議会による取り組みの展開についての基礎的研究を完成させた。

研究成果の概要(英文)：This research examines the “contributory possibilities” of female Asian Christians in Thai society where Christianity is considered a minority religion. The research based its data primarily on a report that investigated the activities of “Theologically Trained Women” in Thailand, which was presented to the Church of Christ in Thailand in 1988. Additionally, the current study focuses on the possible future activities pertaining to ecology and justice for growing environmental issues. The research outcome has contributed to the program development of the World Council of Churches, as well as Christian Conference of Asia, for their continual efforts to address environmental concerns.

研究分野：キリスト教思想史

キーワード：思想史 キリスト教 エキュメニズム アジア エコロジー

## 1. 研究開始当初の背景

今日のキリスト教をめぐる状況を適切に把握しようとするとき、「非西洋諸国の女性キリスト者」は決して見過ごすことのできない行為主体である。アジアの女性キリスト者による神学運動は、西洋諸国の女性キリスト者による神学運動、アジアの男性キリスト者による神学運動から遅れること約20年、1980年代以降に本格化した比較的新しい試みである。しかしながら、この神学運動が非欧米諸国における解放神学の内部から生じたことを原因として、タイと日本においては女性キリスト者に関する研究が例外的に少ないことが指摘されている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、タイのプロテスタント最大合同教派タイ・キリスト教団 (Church of Christ in Thailand) に1988年に発足した「神学的訓練を受けている女性たちのグループ」を事例として、とりわけキリスト者が宗教文化的な少数者に留まっている社会において、アジアの女性キリスト者が持つ教会と社会に対する「貢献可能性」についての新しい視座を提供することである。

本研究の目的は、第二に、アジアの女性キリスト者による環境への取り組みに関する将来の応用研究を念頭に、現在、地域社会や国際社会への「貢献可能性」をはかるための指標の一つとされる「環境倫理」(環境正義)に対するキリスト教の(1)組織的(世界教会協議会、アジア・キリスト教協議会)、(2)エコ神学的、(3)エコフェミニスト神学的取り組みに関する基礎的研究を完成させることである。

## 3. 研究の方法

タイ・チェンマイにて研究対象グループに関する文献研究、メンバーの活動についての参与観察とインタビューによる調査を実施した。また、世界教会協議会 (World Council of Churches) による気候変動問題への取り組みの責任者の勧めにより、ギリシャのオソドックス・アカデミーで開催された「エコ神学と環境倫理に関する国際会議」に参加した。

## 4. 研究成果

(1)「神学的訓練を受けている女性たちのグループ」に関する事例研究では、特に同グループと密接な関係にある教団女性部や「サトリー・クリスティアン」、通称「サトリー・サパー」についての調査を中心とした。

### (1)- サトリー・サパー

サトリー・サパーの前身は、第二次世界大戦前に作られた「王の娘たち」というグループであった。1946年に再始動し、1950年には第1回総会が開かれ、1951年には『憲章と規則』が制定され、海外との協力も始まった。

しかし、1959年に教団が成立したとき、そこに女性たちのための部署が設けられることはなかった。そのため、サトリー・サパーはあくまで任意団体として、教団の外に位置せざるを得なかったが、彼女たちはその関心を「女性のみ」に特化させることなく、教団のあらゆる部門、全国の男性たちと女性たちとの協力、連携をはかっていった。1967年からの10年間、バンコクに教団オフィスを設置するための募金キャンペーンに協力し、その努力は、教団内に「女性部のオフィス」を設置することに結実している。サトリー・サパーが女性部とともに、若い世代のための訓練プログラムを開始したのは1969年のことであり、後継者を育てる努力は現在も継続されている。2015年8月には創立65周年を記念する集会在チェンマイで開かれ、300名以上の参加があった。

このように、サトリー・サパーと女性部の関係はやや複雑である。サトリー・サパーは教団主導で組織されたものではなく、女性たちが自主的に形成したネットワークが元となっている。また、教団に女性部がある今、サトリー・サパー不要論がないわけではない。しかし、責任者カムン・チナウォンによれば、女性部が全教区の女性会と連なり、教団内、国内で展開するプログラムについて責任を負っているのに対し、サトリー・サパーはタイ国立女性協議会の加盟団体であり、国内外のエキュメニカルな交わりにおける窓口としても機能するなど、「対外的」な活動で貢献しているという。

例えば、サトリー・サパーは1958年に始まる「アジア教会婦人会議」(Asian Church Women's Conference, 以下 ACWC)への加盟で知られていることに注目すれば、1950年創立のサトリー・サパーが実質的には、全教区の女性会が束ねられたいわゆる「教会女性」のネットワークであることが分かる。また、サトリー・サパーが、伝統的な(すなわち母/妻の役割を軸として、男性に対して従属的な)性役割を踏襲していることは、先月の65周年記念集会で唱えられた「サトリー・サパーの65年」という祈りの言葉に、「男性の顔を立てる女性キリスト者」という一節があったことにも明らかであった。

### (1)- 神学的訓練を受けている女性たちのグループ

創始者ガモン・アラヤプラティープは、その論攷の中で、まず、「男性も女性も、教育と職業において平等である」との考えを明らかにした上で、神学教育の分野でこれが実現されるまでに、65年もの歳月を要したことを指摘している。タイ神学校が設立されたのは1888年で、当初は男性のみを対象とした神学教育が行われていた。その門戸が女性にも開かれるようになったのは、1953年のことである。その意味で、正にアラヤプラティープは、タイにおける「神学的訓練を受けている女

性」の第一世代であり、自ら神学生の指導にも尽力した「女性神学者」の第一世代でもあった。

アラヤプラティープは、「アジアの女性たちの神学」の制度的基盤の一つであるアジア女性資料センター(AWRC)の1987年の創立大会(シンガポール)に参加した翌年、同グループを設立している。彼女は、神学校で学ぶ女性たちが、性役割を理由として、男性と比べて二次的な職務を割り振られている状況に対し、強い問題意識を抱いていた。

タイにおいて、女性たちが神学教育や按手礼を受けたり、神学の研究者や教員として活躍したりするためには、「文化、アパシー、男性の教会指導者たちへの盲目的な支持、偏見、不正義」といったさまざまな障壁に向き合い、大変な努力を積み重ねていかなければならない。しかし彼女は、男性たちへのみ責任を問うのではなく、「多くの場合に、女性たち自身の間の無関心」にも原因のあることを洞察していた。設立時、女性たちに自らの可能性を信じさせ、神から与えられたユニークな「賜物」を生かしていくこと、そのために、神学的訓練を受けることや、按手礼を受けることもまた、女性であることを理由に躊躇されるべきではないという趣旨が定められた。

このように、グループでは設立当時から「賜物」の重要性が強調されてきた。現在の資料には、「神学的訓練を受けている女性」とは、教団の神学校で学び、さまざまな場所で奉仕している女性と、教団以外の神学校で学び、教団において奉仕している女性(厳密には、神学生も含まれる)であり、グループの基本姿勢は、「主イエス・キリストに対する信仰を持ち、すべての人にとっての光となるために、聖霊の導きによって、力を合わせてミニストリーを行うこと」にある。

その目的は、教団内外の教会、教育機関、施設において継続的にミニストリーを行うためのポテンシャルの強化と開発、ミニストリーの行いにおける一致の促進、若い世代の女性たちが、神学の学びに献身することの奨励と支援、国内外における神学的訓練を受けている女性たちのネットワークの構築である。

興味深いのは、「女性であること」を理由として、「賜物」を用いる範囲を制限する/されることから女性たちを解放しようとするものであるがゆえに、このグループのメンバーは(教会女性と比較して高学歴と言われているにもかかわらず、アカデミック志向であるよりも)明らかに行動志向であるという点、そして、牧師となることを必ずしも最優先事項としていない点である。このグループは、「按手を受けているか否か」によってメンバーを選別することがなく、むしろ、多様な場所で多様な働きを行うことを奨励している。これまでの参与観察では、彼女たちは聖職中心主義に対しては抵抗の姿勢を示し、

信徒を重視し、「普通の女性」の振る舞いを好むことが分かってきた。

例えば、同グループの現代表、実践神学者チュリーバン・スイーン・トーンは、信徒を「牧師と同じように神に仕える者」、「信徒は牧師を必要としているが、牧師も信徒を必要としている」と明言している。これと平行であるのが、「教会女性」は「神学的訓練を受けている女性」を必要としており、その逆もまた然りだということだ。だからこそ、彼女たちの一部が、サトリー・サパーの指導者や女性部の職員として、「教会女性」を導くとともに仕えるという多層的な役割を担っているのであろう。

#### (1) 貢献可能性の多様性

その事例として、サトリー・サパー現代表のスパボン・ヤーナサーンの働きについて調査した。その結果、ヤーナサーンにおける「女性であること」の理解は、基本的に、性役割に基づく本質主義的なものであって、構築主義の立場をとるフェミニストのそれとは根本的に異なることが明らかになった。しかし、正に「教会女性」と「神学的訓練を受けている女性」の間(in-between)に位置するという点において、「教会女性」たちを中心とするサトリー・サパーの指導者として適任であるとされているのである。

「神学的訓練を受けている女性たちのグループ」は、信徒を中心としたいわゆる「教会女性」のグループ、聖職者を中心とした「女性牧師」のグループ、あるいは研究者を中心としたアカデミックな「女性神学者」のグループのいずれでもないところに特徴がある。彼女たちは、「女性キリスト者」の生き方について、一つの固定的モデルを提示することなく、それぞれ異なる賜物を生かすことを奨励している。関連団体サトリー・サパーとその代表ヤーナサーンを事例とした今回の調査においても、恐れることなく賜物を用い、育て、それによってさまざまな働きを行うことに対する信仰的な確信と、継続的な実践を観察することができた。

(2)世界教会協議会(以下WCC)が環境正義に取り組み始めたのは、教会と社会 部会が一九七一年にネミ(イタリア)で「人間と環境に関する会議」を開いたことに始まる。一九七四年、ブカレスト(ルーマニア)における科学技術に関するWCC世界会議で「持続可能な社会」という概念が提唱されたことが、一九八四年のブルントラント委員会を通じて「持続可能な開発」という用語の一般に知られるようになる十年前であった点は、WCCの先見性を示すものとして語られている。

1975年のナイロビ総会が開催され、1970年代半ば以降、「公正で、参加的で、持続可能な社会(JPSS)」が倫理的目標として提唱されるようになる。一九七九年にはマサチューセッツ工科大学(MIT)でWCC世界会議が

開かれた。1980年代、エコ神学関連の書籍が多く出版されるようになり、支配的な西洋のキリスト教に対する抵抗や、そこから先に進むとする意志によって、さまざまな角度からの分析が試みられた。MITで取り上げられたテーマがさらに詳しく取り組まれたのは、新たな目標として「正義、平和、被造世界の保全(JPIC)」が提唱された1983年のWCCバンクーバー総会においてであった。

1990年代以降、WCCによるエコへの取り組みは、「気候変動」(climate change)にフォーカスするようになっていく。一九九二年のリオ・デ・ジャネイロにおける「環境と開発に関する会議」(通称「地球サミット」)で気候変動枠組条約が採択されたことはきわめて重要な出来事であったが、WCCがこれに先んじて、1988年に「気候変動プログラム」と称する対策部署を設けていることは特筆に値する。

また、1990年、ソウルにてWCC世界会議「正義、平和、被造物の保全(JPIC)」が開かれたことは、ネミ会議に始まるWCCの取り組みの具体的帰結を示すものと評価されている。WCCにとって、1992年の「地球サミット」は、諸宗教や(世俗の)環境活動団体との幅広いネットワークを形成するための決定的な契機となった。以降、WCCは、毎年開かれる締約国会議に代表団を派遣し、その動向をモニタリングしていく中で、国連NGOとしての影響力、エコに取り組む諸団体に対する指導力を着実に身に付けていった。

(3)アジア・キリスト教協議会(以下CCA)の場合には、「地球サミット」の同年、チェンマイ(タイ)で「環境と開発に関する会議」を開いたことが環境正義への取り組みの嚆矢となっている。

1995年にジャカルタ(インドネシア)で開かれた「環境と開発 アジアの環境に対する教会の応答」では、これまでの教会指導者たちが「被造世界の保全」を聖書の中心課題と理解してこなかった点が問題視された。

1997年に京都で開催された「気候変動 アジアにおける持続可能な開発への挑戦」は、気候変動枠組条約の締約国会議が初めてアジアで開かれることを契機とした、最初の「諸宗教間会議」であったという点においてきわめて画期的であった。

ここではキリスト教、仏教、イスラーム、ヒンドゥー教の立場からの宗教的考察が行われるだけでなく、神学から環境学まで幅広い専門分野を持つ参加者が集められ、アジア諸国を中心とした環境問題の事例が検討された。そのために特に尽力したのは、CCA開発と奉仕部門のプラウエート・キットアーン氏(タイ)と、荒井俊次氏、大津健一氏、平田哲氏をはじめとする日本のキリスト者たちであった。

2000年、バンガロール(インド)で「地球は私たちの故郷 アジアにおける気候変動

に対する宗教的応答」が開催され、キリスト教だけでなく、イスラーム、仏教からの参加があった。開催地の教会では、牧師や信徒伝道師たちのために天然資源、植林、水質保全に関するセミナーを開かれていることが紹介され、「神と共なる創造者」(co-creator of God)としての働きの必要性が説かれた。

2001年、ソウル(韓国)で開かれた「環境に関するジョイント・トレーニング」では、アジアの教会指導者たちが環境意識に乏しいことに対する危機感が表わされ、エコ意識(eco-awareness)の訓練プログラムための財政支援をはじめとする活動が推奨された。

これらCCAによる初期の取り組みは、主として加盟教会や各国のキリスト教協議会(National Council of Churches, NCC)の指導者たちを対象とした意識高揚を狙いとするものであった。

エキュメニカル運動の「運動」(movement)たる所以は、それに参加するキリスト者が「教わる者」「習う者」であるだけでなく、自ら「学ぶ者」「教える者」として行動を起こし、動的なネットワークに参加し続けることにあるため、環境倫理への取り組みに至っても、個々人の生活圏において実践可能な取り組みを探し出すことが肝要であることが確認できる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

藤原佐和子『『キリスト者であること』と『エコであること』: エキュメニカルな視座から見るエコ神学』(特集: 聖書とエコロジー)、『福音と世界』、新教出版社、2016年、6-13頁。

〔学会発表〕(計4件)

藤原佐和子「アジア・キリスト教協議会(CCA)プログラム委員会報告」、日本キリスト教協議会(NCC) 於立教大学、2016年3月18日。

藤原佐和子「タイ・キリスト教団における神学的訓練を受けている女性たちのグループ: サトリー・サパー(The Christian Women)の事例」、日本基督教学会、於桜美林大学、2015年9月11日。

藤原佐和子「『アジアの女性たちの神学』を基礎としたエキュメニズム、エコ神学、神学教育の研究を目指して」、日本エキュメニカル神学研究会、於立教大学、2015年9月10日。

Sawako Fujiwara, "How to (Re)start Eco-theological Education in Asia: Towards the First Eco-theology Class in

Japan, " the 4<sup>th</sup> International Conference on Ecological Theology and Environmental Ethics (ECOTHEE-15), Orthodox Academy of Crete, Greece, June 4, 2015.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

藤原 佐和子 (FUJIWARA, Sawako)  
同志社大学・研究開発推進機構・助教

研究者番号：20735295

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：